

次回企画展予告

第11回企画展 朝鮮陶磁シリーズ—8

李朝粉引展

会期：昭和61年4月22日(水)～6月22日(日)

会場：当館企画展示室

■李朝の粉引

粉引とは、鉄分を多く含んだ^{むきしつ}胎器質の素地を白化粧液(白粘土やカオリンを水で溶き白泥状にしたもの)を満ちた容器の中にどっぴりと浸し、高台内も含む素地全面を白化粧で覆い、その上に薄く透明釉をかけ、やゝ還元焰さみで焼き上げたもので、焼成後器表面が、白い粉を引いたように、或いは吹いたように見えるところから、古来より粉引(粉吹)と呼び慣らわされている。

李朝時代の前半(15～16世紀)に朝鮮半島南部の全羅道を中心として、焼成されたという粉引は、室町末から桃山時代にかけて茶人たちの美意識が、中国もの中心の書院茶から高麗もの中心の佗び茶へ移るにつれ、朝鮮半島から多く齎らされ珍重された。しかし、今日遺品は非常に少ない。当時の茶人は、茶碗を始め粉引作品のもつ作行、釉肌、口ゴロ目、高台作り、火間、雨漏状のシミ、目・指跡等々細部にわたって注目し、そこに佗びた美を他の高麗ものと同様に見出した。

この企画展では、茶碗、徳利、扁壺、祭器、片口、水注、耳盃等約40点を展示し、茶人たちの富美眼を辿って戴くと同時に、今世紀になって齎らされた作品(発掘品)をも併せ陳列し、比較鑑賞して戴くことをも願っている。尚、同展では所蔵者からの借用期限の都合上、前期と後期に分け陳列することを予めご了承下さい。(K)



粉青の磁器片口

粉青の磁器碗

粉青の磁器白磁器茶碗

お知らせ

第3回講演会の内容が決まりましたのでお知らせします。

日時：昭和61年3月1日(土)

午後2時～午後4時

(受付は午後1時より開始します)

場所：中之島中央公会堂3階中集會室

講師：京都国立博物館調査員

(前大阪芸術大学教授) 藤岡 了一氏

演題：「最近の中国古陶磁事情」

※講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証はお忘れなく必ず御持参下さい。

次々回企画展予告

「近代陶芸—浜田庄司展」

昭和61年7月1日(火)～8月31日(日) 当館企画展示室

談話室

★現在開催中の「李朝鉄砂展」には、虎の文様の壺が2点並んで出品されています。うち1点は館蔵品で、会員の皆様にもお馴染みの作品ですが、今回は全面ガラス張りケースに陳列し、普段見ることのできない表面の鷲と蓮花の文様も御覧頂けます。また、もう1点は、古くから鉄砂の名品として写真では知られていましたが、実物が公開されるのは関西では今回が初めてという作品で、こちらは虎に鹿と竹の組合せです。どちらの虎も長いまつげに大きな眼と「一モラス」に擬人化して描かれ、勇猛な動物のイメージとはほど遠いのですが、逆に形式にとらわれず自由に大胆に描かれた姿にして、誰もが親しみを感じ、思わず微笑んでしまうのではないですか。(No)

★1月26日は文化財防火デーです。各地で行われた防火訓練の様態など、テレビや新聞で御覧になった方も多いと思いますが、当美術館でも去る1月29日、北海道警の協力を得て訓練を行いました。当日、予定通り火災警報が鳴り出すと、館長以下、御客様の誘導や館蔵品の避難などテキパキと動き回中、初めての経験である当事務局長は思わずハンドバッグを抱えてお客様といっしょに避難してしまいました。消防署からは3台の放水車が出勤。消火班の方々の頼もしい姿に感嘆することしきりでしたが、訓練終了に際しての班長のお話「国民の財産たる館蔵品を火災から守るべく…」には、呑気な事務局長も背すじがのびる思いがしました。(Y)

編集後記

昨年末お送りした友の会カレンダーには沢山のお喜びの言葉をいただきました。購入したいとの御希望も多かったのですが、会員数だけが作らなかつたため、あきらめていただきました。御了承下さい。おたよりを下さった皆様、ありがとうございました。(Y)

1986年2月15日発行(年3回)/通巻3号

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.3

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の役割

美術館とは何か、これは美術とは何かという本質的な問いと深くつながっているため、容易には答え難い問題です。しかし私どもの館が、東洋陶磁という枠づけのなかで、あえて美術館と称しているのは、それなりの理由があるからです。

美術館とは、ひろい意味の「博物館」にぶくまれ、美術博物館とも言うべきものでしょう。「博物館」にはこのほか、歴史博物館や自然博物館などがあり、もっとひろい総合博物館もあります。ここでは問題を簡単にするため、「博物館」を美術、歴史、自然の三種に分けて考えてみましょう。歴史や自然博物館を反に狭義の博物館とすると、博物館と美術館とは、その取り扱う資料の相違によって基本的に異なった性格を持っています。博物館の資料とは、それ独自では意味が読みとり難いもの、一定の知識の体系に組み入れられ、説明つきで展示されることによって、はじめて理解し得るものと言えるでしょう。たとえば骨片だけ展示されてもよく判りませんが、北京原人の骨とか恐龍の骨とか解説されていると知的好奇心が刺戟され、より深い知的探求がうながされていきます。しかし美術館の資料は、たとえば三口のヴィーナスは、何らの説明がなされなくてもそれだけで鑑賞の対象となり得ます。見ることによって美的感動が生じ、感性的経験が蓄積されて、やがて人間性の涵養につながっていくのです。

つまり博物館と美術館とは、教育という観点に立つても異なった役割を担っています。博物館は知識の習得、美術館は感性の錬磨を目指すものです。美しいものを見て感動する、そういう場を恒久的に、かつ非営利的に提供する施設、それが美術館というものの基本的な性格だろうと思うのです。そのため、美しいものを美しく見せる展示機能をそなえていくことはなりません。幸い私どもの美術館には、陶磁をできるだけ理想的な状態で観賞して頂く展示設備をそなえています。そこに精選した陶磁を展示しています。およそ芸術の研究や鑑賞には「美的感動」というものが最初にあり、感動することによって知的欲求が生じ、知的学習を重ねることによってさらに深い感動に導かれていくのが常道である、それを信じ願っているのが私どもの美術館の基本的な立場であり、姿勢であるといつてよいと思います。

1986年2月

大阪市立東洋陶磁美術館

館長 伊藤 郁太郎

◆特別寄稿◆

「蓮池鳥魚文俵壺の 文様をめぐって」

(財)松ヶ岡文庫長

古田 紹 欽

古田紹欽先生は、鈴木大拙先生の御高弟で、現在華の研究者として世界的に知られた方です。昨秋、当館に交遊され、当館所蔵の粉青沙羅白地鉄絵蓮池鳥魚文俵壺をご覧になってその鑑付けに関心を持たれ、今回、貴重な論文を御寄稿頂きました。紙面を借りまして厚く御礼申し上げます。なお、当館カレンダー6月の頁に、この作品のカラー写真が出ておりますので御参照下さい。

大阪市立東洋陶磁美術館収蔵の日安宅コレクションは陶磁の専門家の眼識をまつまでもなく、素人眼にもその素晴らしさに感を深くする。なかでも、自分の好みからすると、李朝の数々の名器には心を惹かれる。ある日のこと、同館を訪れた。観ていて異様なまでに陳列ケースのなかの一つのものに気を奪われた。それは「粉青沙羅、白地鉄絵蓮池鳥魚文俵壺」と標示している俵型の壺である。型はいくらかひびつである。その文様がいかにも奇抜である。心を惹かれたのは壺のさりげない無心の出来映えもさることながら、その文様である。壺にきまつた表裏があるとも思えないが、かりに表裏をいうと表には蓮の花を置き、花と花との中間の空中に一羽の鳥が一匹の魚を両足で捉えんとしている風に見える図を描き、裏には同じく蓮の花を置き、その中間に首の長い足長が鳥が水面に立っていて、彼方には小さく空を飛んでいるもう一羽の鳥を描いている。水面は表にも画いているが、よく見ると波のようでもあるが、また火焰のようにも見えるものをかき添えている。壺の胴の横にも描いているものがあるが、それは裏と見るよりは火焰と見た方が近いように思える。不可思議な構図である。陶磁の鉢などには魚文のある例は少ないが、この俵壺に見るような図は未だ見たことがない。

俵壺というのは平つぱたく胸が作られていて、今日でいう水筒のようなものとして旅などに飲みものを容れて携帯用にしたものでないかと考えるが、或は酒などを容れたものであるかも知れない。李朝時代の土俗を調べたら自ら明かになるであろうが、今は素人の推定に任せておこう。

蓮の様子は特に陶磁の上で珍しいものではないが、ただ池の面からヒョロヒョロと二本のびている蓮は、決して花の美しさを表わしているものではない。そこには思想的な何かを背景にして描いているものではない。波のようでもあるが火焰を思わすものがあるのは「火中の蓮華」を、或はいわんとしているとも解される。

この俵壺の図を最初に見た印象は、時偶、ある集りで芭蕉の『奥の細道』を講じていたことから、芭蕉が「千じゆと云ふ所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」と記した後に、——行春や鳥啼魚の目は泪——

とよんでいるその一句に何かつながるものがあるのではないかと、ふと思つた。

その空中に——それは波上といつた方が適切であるかも知れない——描かれている鳥にしても、魚にしても目は殊に強く鋭く、見方によっては泪をたたえているようにも見られる。憶測を逞しくすれば、或はこの俵壺は芭蕉が所持して、『奥の細道』の旅に携えていたものではないかとさえ、思わないではなかつた。蓮の花は行春の季節にもつながり、若し波に火焰を画いているとすると、芭蕉のその旅は水火をも併せぬ覚悟を思わしめるものも、あつたのでないかと、勝手に空想するものもあつた。



1 図 粉青沙羅白地鉄絵蓮池鳥魚文俵壺 (h. 14.4cm)

水火といえは神話に「蓮は風火に墮して散らず」という句がある。或はそれをこの図は象徴しているのではないかと、空想に空想を重ねる。

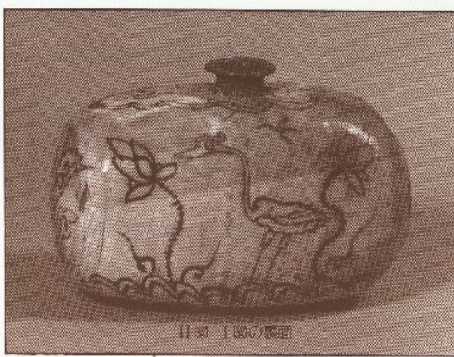
表の図の鳥魚の鳥は若し魚を捉えて食わんとしている恰好を描いているとすれば、その鳥は鶴——しぎ・かはせみ——かも知れないし、裏の図の鳥は鷹とも見られる。蓮華に托される清浄平安な世界を願つても食つたものと食われるものとの運命は、現実には惨酷でどうすることも出来ない、そのことを穿って考えれば考えられないことでもない。

禅の有名な公案の一つに「智門禪師に伺問う、蓮華末だ水を出でざる時如何。師云く、蓮華。云く、水を出でて後如何。師云く、荷葉」という問答がある。智門は随州智門寺に住した光祚であり、宋代に禅の一派として栄えた雲門宗に出でた名僧であり、この人の門下からは『碧巖録』に見る「頌古百則」を編した雪竇重鎮など多数の逸材が現れた。因にこの公案は『碧巖録』にも収まる。

蓮は荷ともいい、蓮華は荷華とも称する。中国は南北を大きく地理の上に隔て、蓮のことを北では荷といったと伝える。蓮と荷とを併せて熟字して蓮荷ともいうが、こんなところにも餘談ながら花の上に南北の交流接点があつたのではないかと、そんなことをも臆測する。荷葉は文字通り蓮の葉であるが、蓮の蓮たることは華にあつても葉にあつても、もとより変りはない。

ここでこの公案について、宗旨にかかわることを云々するつもりはないが、敢てこの公案に托して鳥魚の図についていうならば、魚は水中にあつても空中にあつても、魚の魚たることに変りのある筈はない。智門光祚に事実「魚、陸地に遊ぶ時、如何」という公案があり、それを示唆もしている。鳥は自からその能く飛ぶことを知り、魚もまた自からその能く遊ぶことを知っているに違いないが、陸地にあつても遊ぶなくてはならないことだつて決してないわけではない。陸地であれば智門も「死を取ることを遅からず」ということに必然的になるが、遊ぶことそのことは、水中にあつても陸地にあつても変ることはない。蓮華は現象的には水中にあるのと、水中を出でた時とは変るが、本質的には蓮華の蓮華であることに変りはない。蓮華

に加えてこの鳥魚を描いているのは、恐らく智門光祚の云つて踏えていることを踏えて、図案化しているものと推定されよう。加えて風火にも散らないものを蓮華の上にいわんとしているのではなからうか。



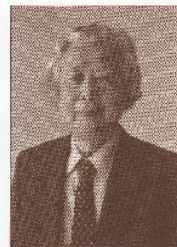
2 図 蓮池鳥魚文俵壺

なお、屁理窟をいえば鳥魚の図は油鷗魚を併せて意味しているのではなからうか。油鷗魚は鷹鷹の類の鳥である。油鷗魚はその魚の形が油鷗に似ていることからいわれ、体は扁平、尾は薄く尖長、背は青黒く、腹は白く、海底に潜伏して小魚を捕えて食うという。この鳥魚の鳥は正しくこれを思わすものがあり、油鷗魚は鳥であつて魚であることを、鳥魚併せて空中に描いたものではなからうか。これがまた体が扁平であるから携帯した俵壺の形にも通ずるものがある。このことを一層裏づけるものとして、油鷗魚は荷魚とも呼ばれることを考えると、何か頷けるものがあるように思わざるを得ないのであり、その荷は荷葉にもまた無関係ではないことになる。また荷の意味は肩になうものであり、すると俵壺の使用の方法にもつながるものがある。俵壺にしてこの鳥魚が描かれたのは所以なしとしない、考えても決して牽強附会ということにはならないのではなからうか。鶴は猛禽として鷹と共に禅録にも出てくる。禅とは無縁の鳥ではない。

陶磁には多くの文様が見られる。無作意に描かれているように思われるものにも、思想・文化の背景が根底にあることを窺はしめるものが少なくない。興に任せてこの一文を草したが、なお究明なくてはならない問題が残されていることはいうまでもなからう。

プロフィール

古田 紹 欽 氏



文学博士、1911年生、岐阜県出身。1936年、東京帝国大学文学部インド哲学梵文学科卒。北海道大学・日本大学教授などを経て、現在松ヶ岡文庫長、出光美術館理事。著書は、「古田紹欽著作集」全14巻(講談社)など。